

WHAT IS?

國學院大學の「渋谷学」

「渋谷学」とは、國學院大學が立地する「渋谷」地域を対象として、「渋谷を科学すること」をテーマに掲げ、歴史学・民俗学・地理学・宗教学・経済学などを軸に据えた学際的な研究を行うのみならず、地域社会への貢献や地域社会との連携を視野に入れた取り組みである。そもそも「渋谷学」を主唱したのは、「現代日本の都市文化の創造と発信の源ともいべき『シブヤ』に魅せられた者や、メガロポリスの副都心としての渋谷がどのように形成されてきたのかに関心を持つ者、さらに先端的な企業・流行を生み出す地域経済の解明に興味を持つ者」(渋谷学叢書2「はじめに」)である。こうした多様な側面から渋谷に関心を持つ國學院大學の関係者によって「渋谷学研究会」は発足し、平成14(2002)年には國學院大學創立120周年記念事業の一環として「渋谷学」が採用される。以後「渋谷学」は、渋谷区や東急電鉄株式会社と連携しつつ、公開講座・研究会などを継続して実施し、平成21年以降は國學院大學研究開発推進センターのマネジメントにより事業を展開し、平成23年には國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」として策定され、今日に至る。

國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会

「渋谷学」の刊行物

■ 渋谷学叢書

- 『渋谷学叢書1 渋谷をくらす—渋谷民俗誌のこころみ—』(雄山閣、平成22年)
- 『渋谷学叢書2 歴史のなかの渋谷—渋谷から江戸・東京へ—』(同、平成23年)
- 『渋谷学叢書3 渋谷の神々』(同、平成25年)
- 『渋谷学叢書4 渋谷らしさの構築』(同、平成27年)

■ 渋谷学ブックレット

- 『<渋谷>の神々』(平成22年)
- 『地元を「科学する」ということ 地域学の比較から考える』(平成23年)
- 『渋谷を描く』(平成24年)
- 『結節点としての渋谷—江戸から東京へ—』(平成26年)

■ 渋谷聞きがたり

- 『小倉基が語る東京と渋谷 元都議会議長・前渋谷区長のオーラルヒストリー』(平成25年)
- 『「しぶちか」を語る—戦後・渋谷の復興と渋谷地下商店街—』(平成26年)



平成27年度 第4回

企画展 < SHIBUYA >

会期 8.22(土)~9.30(水)

会場 國學院大學博物館 企画展示室

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 [TEL] 03-5466-0359

[WEB] <http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/index9.html>

開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで) 入館料 無料

休館日 8/24・8/31・9/7・9/14・9/18

主催 國學院大學博物館・國學院大學渋谷学研究会

後援 渋谷区・毎日新聞社

協力 井賀孝、岡本太郎記念館、株式会社東急百貨店、川崎市岡本太郎美術館、金王八幡宮、渋谷中央街、渋谷氷川神社、清水建設株式会社、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、東急グループ、東京急行電鉄株式会社、富沢瑞夫、明治神宮、大和市、吉村美術研究所、MASS RHYTHM(高橋優・藤原惇・南陽平)



平成27年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業



國學院大學博物館 企画展

SHIBUYA

渋谷、25000年間の履歴書

あなたは見たことがありますか？

博物館で知る<SHIBUYA>のものがたり

平成 27年

8.22(土) ▶ 9.30(水)

 國學院大學博物館
Kokugakuin University Museum

photo by 井賀孝

序章 はじまりは鄙 ひな —渋谷の地下に眠る過去—

Prologue In The Beginning it was a Rustic

日本を代表する国際都市<渋谷>。渋谷川と宇田川が合流する3つの谷の谷底に、渋谷駅がある。ここから坂を上った台地に人々が住み着いたのは、約25000年前の旧石器時代である。川沿いの台地上に遺跡が多く存在し、過去の渋谷は、人間の生命維持の基本を備えた地であった。縄文・弥生時代には大規模な集落が形成されたものの、この地は長らく、どこにでもある普通の田舎町だった。国家形成が進化した古墳時代・古代にあっても、なお東国のさびれた村としての位置づけを出るものではなかったらしい。



鷺谷遺跡遠景 (渋谷区教育委員会提供)

第1章 渋谷界隈の社寺と祭礼 —地域社会の信仰空間—

Chapter 1 Appearance of shirines and temples in SHIBUYA

渋谷という地名の由来は、川の水が鉄分を多く含む赤さびの「シブ色」であった、あるいは、入江であった「塩谷の里」のシオヤがシブヤに変わった等、諸説ある。中世の渋谷は、渋谷氏の拠点として発達したともいわれる。金王八幡宮は、渋谷氏の祖が創建したものとされ、古くは渋谷八幡宮とも称された。渋谷氷川神社の別当宝泉寺も、渋谷重本の開基とする説がある。古社として著名な金王八幡宮と渋谷氷川神社は、地域社会の核である信仰空間であった。

両社は、江戸の名所としても知られていた。江戸時代中期には、江戸赤坂御門を出発し、現在の宮益坂、ハチ公前、道玄坂を通り、雨降山で有名な大山阿夫利神社(神奈川県伊勢原市)へと至る大山街道は、当時、庶民のブームとなった「大山詣り」の参詣道として盛んに利用され、賑わっていた。江戸時代後期になると、信仰の道としてだけでなく、江戸へ物資を運ぶ輸送路としても利用され、商人達によって、さらに活気を見せたという。



『江戸名所図会』より「金王八幡社」(上)「渋谷氷川明神社」(下)

第2章 都市住民の物語 —人工の森出現と忠犬ハチ公—

Chapter 2 The story of the Urban inhabitants

■未来を想う、広大な人工の森

大正9(1920)年、東京を発端として始まった全国規模の請願が実るかたちで、当時の社寺建築の泰斗・伊東忠太や構造学の大家・佐野利器ら主導のもと、明治天皇と昭憲皇太后を祀る明治神宮が創建された。同時に、当時の林学や造園学分野の叡智が集められ、150年後の未来を見すえ、「人工の森」から「天然更新」によって「永遠の森」へと成長するという壮大な構想の森が造営された。のべ11万人の青年団の勤労奉仕者の手によって、全国から献納された約10万本の樹木の森である。第二次世界大戦の東京大空襲によって焼失した社殿は、戦後に復興を遂げ、95年前の「永遠の森」は地域の人々と共に、今も生きている。

■公共交通の発達と忠犬ハチ公

江戸時代の渋谷は、大山詣りの参詣道である大山街道が通り、賑わいを見せていたが、近代以降、鉄道の発達や、関東大震災の復興に伴う商業地の整備によって「都市」が出現する。かの有名な忠犬ハチ公物語も、ターミナルステーションである渋谷駅の存在を抜きにしては生まれえなかった。今も駅前の人々に囲まれながら主人を待つハチ公は、じつは再生した2代目である。初代は、第二次大戦時の金属回収で鋳潰されている。今、スピンオフである高座渋谷のデコハチ公が、この地でオリジナルのハチ公と邂逅する時、彼の眼には何が映るだろうか。



初代ハチ公像 (渋谷区教育委員会提供)

祈りと欲望が渦巻く カオス都市、渋谷。

ビルの森にぽっかりと空いたスペースにある、スクランブル交差点。

この地は、かつて渋谷川と宇田川の

水の流れによって形づくられた、

3つの谷が会う場所である。

この谷底では、昼夜問わず、夥しい人・物が交錯し、

金・音・電波が宙を飛び交い、カオスの中心となっている。

多くの人が、渋谷を訪れ、その名を知っている。

しかし、この地には、知られていない姿が多くある。

ひとたびアスファルトを引きはがすと、

地下には、旧石器時代から渋谷の地に

人々が住みつづけている証が眠っている。

地上には、中世までさかのぼる古い神社が、今も存在する。

約100年前、明治神宮の鎮守の森は、150年後の未来を見すえ、

のべ11万人の手によって造られた。

渋谷のシンボル・忠犬ハチ公像は、じつは2代目である。

1964年の東京オリンピックを契機に、

さまざまなモニュメントが集結しつづけている。

秋になると、SHIBUYA109前に神輿14基が集結し、

昔ながらの伝統的な祭りが今も続けられている。

そして、渋谷駅中心地区は、2027年という未来へ向け、

今まさに〈SHIBUYA〉へと生まれ変わろうとしている。

はるか昔から、人々とモノを引き寄せ、

いくつもの物語を生みだしてきた〈渋谷〉。

〈SHIBUYA〉という「場」がもつ、地の力とは——

第3章 ビルの森で「もやい」を求めて

—物語なき世のモニュメント—

Chapter 3 Looking for “MOYAI” among the Forest of Skyscrapers



昭和39(1964)年頃の渋谷駅東口付近 (富沢瑞夫・昭子夫妻制作ジオラマ)

昭和39(1964)年の東京オリンピック開催によるインフラ整備によって、渋谷はスクラップ&ビルドされ、国際都市<渋谷>へと変貌を遂げていく。代々木体育館や更新された渋谷駅は、その象徴的存在だろう。多様なモノ・ヒトが集結し始め、高度経済成長後の<渋谷>は、地方出身者の坩堝となる。彼らは、渋谷駅界隈に林立するモニュメントやランドマークを目指し、出会いと別れをくり返した。再び生まれ変わろうとしている<渋谷>に集結する人々は、今後、どこへ向かうのだろうか。

第4章 死と再生の神話 —私たちの向かう未来の地平—

Chapter 4 Myth of Death and Rebirth



渋谷駅の巨大壁画<明日の神話>

平成20(2008)年、再生した岡本太郎の壁画<明日の神話>が、メキシコから<渋谷>の空中回廊に移された。スクランブル交差点から見上げる位置に浮いているこの壁画は、第五福竜丸が被爆した水爆炸裂の瞬間を描いたもの。あれから60年。<明日の神話>は、対となるはずだった幻の超巨大壁画<豊稔の神話>とともに、再生の過渡期にあるスクランブル交差点を行き交う人々に対し、3.11後の私たちの始まりと、向かうべき場所が何処にあるのか、あらためて問いかけようとしている。

結章 そして、SHIBUYA

—過去・現在・未来を結ぶ地の力—

Epilogue And then...Eventually SHIBUYA Power of the Land -Past・Present・Future-



渋谷中央街神輿

現代<渋谷>のモニュメントと、伝統祭礼とは、同じ空間に共存している。毎年秋になると、道玄坂の麓に屹立するSHIBUYA109の前や、首都の幹線道路である明治通りに、御霊が入った神輿14基が集結する。地域社会で代々受け継がれてきた神輿は、渋谷の過去・現在・未来を凝集する、生きるモニュメントといっても過言ではない。古来、地域社会の核、心のより所として機能してきた神社の祭りは、都市がどのように相貌を変えようとも、未来を担う子孫へと受け継がれていくにちがいない。

<渋谷>という都市は、これからも幾度となくスクラップ&ビルド、死と再生をくり返し、更新されることだろう。しかし、いくら新しい高層ビルに囲まれ、アスファルトに覆われようとも、渋谷という場がもつ「地の力」は埋もれることはない。この場所に立つ私たちを透して、未来の<SHIBUYA>物語は、もう、つむぎ出されはじめている——